



TITLE:

ニホンザル野外観察施設(I 研究所の概要)

AUTHOR(S):

岩本, 光雄; 東, 滋; 渡辺, 邦夫

CITATION:

岩本, 光雄 ...[et al]. ニホンザル野外観察施設(I 研究所の概要). 霊長類研究所年報 1986, 16: 28-29

ISSUE DATE:

1986-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/163664>

RIGHT:

方第二岩陰遺跡出土の頭骨について。京都大学霊長類研究所。

- 9) 野上裕生 (1985) : サルの歯とりん灰石。モンキー, 29(201, 202) : 35-37。
- 10) 相見 満 (1985) : 「ヤクシマザル」か「ヤクザル」か。モンキー, 28 (3, 4, 5) : 45。
- 11) 相見 満 (1985) : 「ニホンザルの学名」その後。モンキー, 28 (6) : 24-26。
- 12) 松本 眞・相見 満 (1985) : コノハザル (リーフモンキー) のプロポーショナルについて。モンキー, 29 (1, 2) : 38-41。
- 13) 松本 眞 (1985) : 北モンゴル出土の化石はコロブスモンキーのものか? モンキー, 29 (1, 2) : 41。
- 14) 松本 眞 (1985) : 大後頭孔はどのように動いたか。季刊人類学。16 : 29-43。

学会発表

- 1) 江原昭善・松本 眞・木下 實 (1985) : 朝日遺跡の人骨および犬骨出土状況について。第39回日本人類学会。日本民族学会連合会。
- 2) 相見 満 (1985) : コノハザルの分布の展開—スマトラの例。第39回日本人類学会。日本民族学会連合大会。
- 3) Setoguchi, T. and Rosenberger, A.L. (1985) : Some new ceboid primates from the La Venta, Miocene of Colombia. VI Congreso Latinoamericano de Geologia, Bogota, Colombia, S.A.
- 4) 瀬戸口烈司 (1985) : 根井の式の分子時計としての有効性。第39回日本人類学会・日本民族学会連合大会。
- 5) Rosenberger, A.L. and Setoguchi, T. (1986) : Fossil marmosets ... and more ... from the La Venta Miocene of Colombia. 55th Annual Meeting of the American Association of Physical Anthropologists, Albuquerque, New Mexico, USA.
- 6) 松本 眞 (1985) : マンドリルの突顎と分類上の意義。第39回日本人類学会。日本民族学会連合大会。

ニホンザル野外観察施設

岩本光雄 (施設長・兼) ・東 滋・渡辺邦夫

本施設の運営は上記3教官のほか、川村俊蔵・和田一雄・鈴木 晃によって進められた。昭和60年度の各ステーション関係の状況は次の通りである。

1. 幸島観察所

今年度は五百部裕による「ニホンザル幸島群におけるメスの社会関係についての研究」、室山泰之による「ニホンザルのグルーミング行動に関する社会生態学的研究」、樋口義治による野外でのオペラント学習実験などが行われた。また特定研究「生物の適応戦略の一環として、イモ洗いなどの文化的行動の解析 (河合雅雄, 渡辺邦夫, 霊長研; 樋口義治, 愛知大) や第三者による争いへの介入・援護といった利他的行動の実態 (渡辺邦夫) などの研究が行われた。昭和60年度に島を訪れた研究者は延339人, その他に大学や報道機関等の関係者の訪問が延186人にのぼる。昭和61年3月末日現在, 島内のサルの個体数は主群74頭, マキ群12頭, ハナレザル8頭の計94頭であった。

2. 下北研究林

M群について非積雪期の長期連続追跡が試みられた。まず4~6月, 岡野美佐夫 (北大・文) が, 社会生態の研究を行い, この群れの行動域が大畑川流域におよび40kmを越すことを確かめた。11~12月綿貫 豊・中山裕理が, 冬ごし前の採食生態の研究を行った。12月と3月に西北部の地域個体群のセンサスをめざした調査, 1月にM群と分裂群A_{RA}の遊動の同時追跡調査が試みられた。これらの結果, 過去10年余の間「択伐」あるいは小面積皆伐が行動域内で進められたI, Zの両群では, 1982年以後個体数が減少しており, (Z : 63→84, I : 59→61→40) これらの群れでは1983~4年の厳しい冬に高率の死亡が発生したと推測される。

生息環境評価の側面では, 11月に荻野和彦, 二宮生夫 (愛媛大・農) によりヒバ林施業跡地永久プロットでの最新の調査 (10年目), また9~11月に森 治 (大畑小) ・和田 久 (大湊小) らがリタートラップによる果実生産量の測定 (初年度) を行った。

3. 上信越研究林

横湯川流域の植生とseed trap法による果実生産量の調査 (小見山章, 岐阜大), 志賀C群の生態, 行動調査 (陸 育ら, 東京農工大), 志賀A₂群の生態調査 (長谷川寿一, 東大) が, ひきつづき行われた。山本教雄 (志賀高原野外博物館),

和田一雄、陸 斉は、雑魚川流域の研究林における施業、林道修復工事によって出る捨土処理等について飯山営林署の関係者と現地で話し合いを行った。

横湯川下流域の山ノ内町で頻発する猿害問題について、山ノ内町が猿害対策委員会を組織して対処し、山本教雄・和田一雄・陸 斉がそれに参加した。

4. 木曽研究林

猿害防除のための追い払いと、観察のための接近の二律背反を解決するひとつの手段として、ショウブ平でS群の餌づけとブラインド小舎による観察を昭和59年度末から実行に移した。昭和60年4月中に群れは完全に餌場を認知し頻繁に訪れるようになった。そして亜成年以上のオス全個体と、同じくメスの一部の個体識別が行われ、個体記録原簿の作製にとりかかった。

K群に対しては、新たに生息地を拡大しつつあるA群とともに、引き続き追い払いが行われている。そしてA群に関しては、地元村が捕獲の線を打ち出したが猿害生起の実情と対策を示し、実害を及ぼしている群れ外オスを中心に少数捕獲に切り換えることにさせた。

遊動、社会行動等に関する各群の追跡調査は、例年通り行われ延 190 日に達している。

5. 屋久島研究林

個体追跡による採食生態（丸橋珠樹、霊長研）、採食による樹形変化と枯死（湯本貴和、京大・理・植生研）、複数群をめぐってのオスの社会学（Sprague, D・竹内直比、京大；山極寿一, J. M. C.）などの研究が進められた。7月に西部林道沿の22群についてセンサスを行った。

瀬切川上流と花山原生自然環境保全地域で、上部域の群れの生態調査が好広眞一（龍谷大）、黒木一男（泰星高）、大竹 勝（J.M.C.）により行われた。

2～3月、約50日間にわたって屋久島の全島で有害鳥獣駆除による捕獲実態と死亡個体の調査・資料化に関する緊急調査を行った。

総 説

- 1) 東 滋（1984）：なぜに屋久島のサルなのか—屋久島での研究の意味。モンキー, 197, 198, 199 : 46-52。
- 2) 東 滋（1984）：サルと森と人—ひとつの

生物的自然の歴史。モンキー, 197, 198, 199 : 94-102。

学会発表

- 1) 東 滋（1985）：狩猟獣の資源量。シンポジウム「狩りと漁撈」国立民族学博物館, 大阪。
- 2) 東 滋（1986）：日本民族文化の源流の比較研究, シンポジウム第Ⅷ回「狩りと漁撈」国立民族学博物館, 大阪。

サル類保健飼育管理施設

竹中 修（施設長・兼）・松林清明・後藤俊二・鈴木樹理・松林伸子¹⁾

サル類保健飼育管理施設の昭和60年度は業務面においては平穏に推移した。これはここ5年来努力を傾けてきた繁殖コロニーの運営が、研究用マカク類の定常供給の目標には達しないものの、具体的な供給計画を立てられる状態になったこと、パリ動物園との間でニホンザル一群と交換したオランウータン（ドゥドゥ）・チンパンジー（クロエ）も検疫を終え研究所の一員として定着したこと、昭和58年来取り組んで来た長瀬野猿公園のイレズミによる個体台帳を基礎とした個体数調節と飼育管理指導の業務が一段落したこと等による。

しかしながら、昭和62年度概算要求を企画する段階になって、研究用サル類の所外への供給、骨格・液浸標本等サル類資料の供給等を含む「霊長類繁殖資料センター」構想が提起され、松林助教授が中心となって素案をまとめた。当施設の将来像を考える上で転換点となる年であったかもしれない。外国との交渉では昭和60年12月上旬に、松林助教授は日本実験動物学会より派遣され、実験用霊長類研究視察団の一員として約2週間、中国を訪問した。広州・昆明・西双版纳・北京各地のサル類の飼育繁殖施設や関係の研究機関を訪れ、繁殖や利用の現状を視察して情報・意見の交換を行った。人事面では昭和61年2月に長谷川正衣技官が退職した。第6次定員削減により後任を補充することができず、非常勤職員として春原則子・本田ヤス子の2名を採用し飼育業務に充てること

1) 教務職員